2025年6月1日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

弱いこの身によってこそ

［フィリピの信徒への手紙1章12～14、20～30節］

兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。

そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることになります。ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。つまり、あなたがたには、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。あなたがたは、わたしの戦いをかつて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです。

[1] フィリピの教会とパウロ

　今月はパウロの晩年近くに書かれたと言われている「フィリピの信徒への手紙」をご一緒に読んで行きます。フィリピの教会というのは、ギリシャのマケドニア州にある、パウロによるヨーロッパ伝道の初めの頃に生まれた教会です。それは使徒言行録16章に記されていますけれども、神様は一人の女性リディア（ルデア）の心を開かれ、リディアをとおし、主イエスが周りの者たちに伝えられていって、それが教会の母体になって行ったようですね。フィリピは当時、ローマ帝国の植民地でしたから、イエス・キリストを伝えるということは町を混乱させるとんでもない輩ということになり、その時もパウロとシラスは迫害され、鞭を打たれ、投獄されてしまったのですね。しかし、その投獄中に奇跡が起こって、その牢の看守とその家族までもが主イエスを信じるようになったということが起こりました。パウロたちも釈放され、それからまたテサロニケの方に行くのですけれども、その後もフィリピの教会とパウロとは良い絆が結ばれていたようで、それがこの手紙の初めの部分でも分かります1:3～5だけお読みするとこうあります。「わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。それは、あなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっているからです。」

　そして今、パウロはその時からは年月が過ぎ、この時も捕らえられて、恐らくは大都市ローマで投獄されているのです。彼はいつかローマで伝道したいと願っていましたけれども、図らずも囚人としてローマに運ばれました。フィリピの教会の者たちもそれを知って手紙と贈り物をパウロに届けました。そのレスポンスがこの「フィリピの信徒への手紙」です。ですからこれは獄中からの手紙で、実際その後、彼パウロはあの暴君皇帝ネロによって殺されたと言われますが、その数年前の手紙ではないかと言われます。そう見ると、パウロは自分の「最期」というものを見つめながら、しかしフィリピの教会の人々を励ましているのだな、と感じさせられる手紙です。

[2]　なぜ「福音の前進」と言えるのか

　当然ですが、獄中という所は自由を奪られる場所です。「お前は良からぬ人物であり、この中にとどまれ」ということですね。正に「壁」に囲まれています。人によってはノイローゼになるでしょう。パウロがそれ迄自由にその体で伝道していたのに、今は動けません。しかし、パウロはここで驚くべきことを記しています。12節。「兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。」―なぜ「福音の前進」と言えるのか。二つあると言っています。一つは、「わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡ったこと」つまり、キリストがそこで証しされているということ、もう一つは、「主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになった」と、この事でかえって教会に力が注がれる契機になった、ということを喜んでいるのですね。人間的な状況は或る意味、八方塞がりなのです。でも、それこそあの「Tomorrow」（岡本真夜さん）の歌のように、「アスファルトに咲く花のように」命が漲っているパウロの内側が見えてきます。そして、教会もまたこの苦難の中に在って「アスファルトに咲く花のように」証しをして前進しているのです。

ここで注目すべき言葉は、パウロが「わたしの身に起こったこと」と言っていることです。くどくど説明していないのです。しようと思えば出来るでしょうけれども。今は不自由にされている「この身」が、キリストを証しする舞台とされているということをパウロはただ感謝しながら、驚きながら語っているように思うのですね。私たちは否が応でも、身体を纏（まと）って生きています。身体があるので、私たちは限界があります。時には病気にもなるし、怪我もします。年齢を重ねる毎にどうしても若い時のようには出来ないことも増えていく。パウロはある手紙の中で自分の存在を「土の器」と言いましたけれども、言ってみれば本当に土くれのような存在だと。しかし、彼は「この宝を、土の器に納めています」（二コリント4:7）と言うのですね。宝がここには盛られているのですと。それは何でしょうか？―キリストです。キリストの命が私たちの中に宿っているのです。

パウロは、フィリピの信徒への手紙の1:20以下で、このように語っています。「そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。」　ここでも「わたしの身によって」と語っています。「わたしの身によってキリストが公然とあがめられる」と。キリスト教は—福音は—精神と体を分けて捉えないのです。「土の器」を大事に考えます。私たちは、最後の日まで、この「土の器」と付き合って生きて行きます。切り離せません。

そして、私たちの信じる神様は、ふわふわ浮いた存在の神様ではありませんね。あのクリスマスの日に赤子として、肉体を取って生き始めて下さった神様です。それは、本当の意味で私たちと連帯して下さるためですね。ですから主は、具体的に肉体の痛みをも背負って下さいました。私たちのために、血を流して下さいました。そして、それだけじゃないです。私たちがその主の体と血潮を忘れないために、今、私たちと一つとなって下さっている主を覚えるために、「主の晩餐式」を残して下しました。今日も、このあと、その主の晩餐式に与ります。

[3] 十字架の主と一体化されて

 パウロは「わたしの身によってキリストが公然とあがめられる」と言いましたが、普通、神様の栄光を表す体と考えると、例えば『炎のランナー』のような一流のアスリートを思い浮かべると思います。しかし、元気な体だけではないのではないでしょうか。パウロは「主をあがめる」と言う時、「生きるにも死ぬにも」と言っています。驚きではないでしょうか。私たちは、死は、消滅か衰えの極致のように考えますが、死が与えられていることは、私たちを真に生かしてきた主がそこで輝くことだと言っているのではないでしょうか？弱い「この身」のままで良いのです。変化していく体で良いのです。主がその中に生きて下さっている命なのですから。私は本当に慰められます。

そして、パウロは、究極的なことを語っていると思います。1:29。「あなたがたには、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。」私たちは生きて行く以上、苦しみを経験します。しかし、主につながっている時、「苦しみ」の意味が変わって来るのではないでしょうか？この世の苦しみは、主がいなければ不条理のままだと思います。しかし、主が私と共にいて下さる時、それは、十字架の主のお苦しみに合わせられて行くこと、主と一体化させて頂くという意味の苦しみに変わるのではないでしょうか？ペトロは、その第一の手紙の中でこう書きました。「あなた方が召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなた方のために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです」（ペトロ一2:21）。

あのハンセン病の島に渡ったダミアン神父が、遂に自分もハンセン病者になった時に、自分にも人々の苦しみと主の苦しみを分けて下さったと感謝しましたけれども、それは人間の力では出来ませんよね。これは自分の意志や力では絶対に無いです。私たちの信仰生活も、そうだと思います。私たちは信心深いから教会に来るのでしょうか？そうじゃないですよね。罪人だから来るのです。毎日毎日、十字架の主を仰いで生きる恵みが私たちには与えられている。そして、どんな困難な状況の中に置かれても、目に見えない壁に囲まれても、アスファルトに咲く花のような命を与えられていることを大胆に信じ、与えられている生活を感謝しながら生きて行きたいと思います。お祈りを捧げます。

　主なる神様、とても弱い私たちです。しかし、私たちは弱さを知らされていることは恵みです。自分の力で生きようとすればあなたを捨ててしまう私たちです。そして実際そうでした。しかし、あなたは私たちを見捨てず、十字架と復活によって現実の私たちと連帯して下さったお方です。感謝致します！生きるにも死ぬにも、この身を通してあなたをあがめさせて頂けますように。来週は聖霊降臨日を迎えます。聖霊よ、私たちを益々捉え、あなたの命の中に力を得て、これからも生かして下さい。パウロを生かした主が私たちと共にあることを信じさせて下さい。主イエス・キリストによって祈ります。アーメン。